

# 山と博物館

第9巻 第10号

1964年10月25日

大町山岳博物館



## 秋日 雑感

8月に入って山岳博物館を訪れる人が  
にわかに多くなった。

昨年比べ8月が2倍、9月が3倍、  
10月は4倍を超える入館者がある。

しかし、事務室で観覧業務を取り扱い  
ながら何時も肩身の狭い思いをするのは  
施設や資料の乏しいという事である。

今すぐ本館を建てなおすという事は  
とてもできない相談だろうが、古い建物  
でも面積だけはあるので、当面、資料の  
整備充実をはかり、展示ケース、展示用  
器材器具を充足し、効果的に観覧ができ  
観覧者に満足していただけるものにして  
いきたいと思う。

又、更に展示場と関連して、生きた北  
アルプスの動、植物を観察してもらうた  
めに、旧博物館周辺にある動物園は年間  
計画で移転し、整備することが大切であ  
る。

生きたものがそのまま、博物館の展示  
と連がるということは大変すばらしいこ  
とだと思ふ。

その上、それらの動物の生息環境はこ  
の博物館の台地からは一望できるのであ  
る。

動物園の移転はここ何年来からの計画  
であるので、何んとかしたいものである

(藤巻厚美)

# 秘境を訪ねて

## 黒部源流

武田睦男

黒部川の源流、雲の平、高天ガ原周辺は、最近まで秘境として訪れる人も殆んどなかった。しかし、四・五年前雲の平に小屋ができた。黒四ダムが一般に開放されてからは、登山者も多くなり、次第に秘境黒部の源流が脚光を浴びてきた。また、その秘境への道も最近幾つか新設され、楽しい山旅ができるようになった。

さて、これから紹介する秘境「黒部」とはどの辺りであろうか。地図をひもどいて見よう。国土地理院発行の五万分の一地図「槍ヶ岳」の左半分を占める一帯であり、雲の平は中央に奥の平(雲の平)の地名がはつきり記されている。しかし、高天ガ原という地名は見当らない。奥の平の真北(地図では上が真北の方向)に岩苔小谷があり、そのすぐ右側に等高線の巾広い箇所が高天ガ原である。標高二一〇〇米〜二二〇〇米位で、このあたり原始林が切れて、湿原となつて沢山の池塘が点在し、水晶岳や薬師岳の姿を水面に浮べている。

高天ガ原へのコースは幾つかある。①大町―烏帽子岳―赤岳―岩苔乗越―高天ガ原 ②上高地―槍ヶ岳―三俣連華―岩苔乗越―高天ガ原 ③高山―双六小屋―岩苔乗越―高天ガ原 ④富山―太郎小屋―薬師沢―高天ガ原 ⑤黒部湖―東沢―赤牛岳―高天ガ原 ⑥黒部湖―東沢―上廊下―高天ガ原、以上六つをあけてみたが、いづれも入山するのに二―三日の日程を要する。紙面の都合で、こゝでは⑥

⑥のコースについて紹介してみたい。

### 黒部湖―上廊下―高天ガ原

上級者向き、幕営の準備がほしい。現在は黒四ダムから東沢まで船の便がないので、平の小屋まで左岸を歩き、平の渡場を右岸に船で渡り、水平な道路を東沢まで行く。ダム代替歩道として一米巾に整備してあるので困難なところは少ない。

東沢を渡るとすぐ読売新道の看板がかまっている。この道を五分位いくと上廊下をへて高天ガ原への分岐点となる。

読売新道と別れ、右に平坦地を少し進むと尾根への登りである。尾根に出ると上廊下を眼下に眺めながら赤牛岳の山腹を登り下りしながらまいていくのである。

三つ目の沢を越して尾根筋を下り切ると、兩岸切り立った無気味な様相をした下のタル沢に出る。黒部川の本流に出て、約二K河原を歩き、スゴウ沢の手前の沢を少しつめてから、急な尾根を登る。高度差三〇〇米あえぎあえぎ登りきると、姿見平である。幕営地としても好適、薬師岳が美しい。

やがて大きな沢を一つ越えるとヒエバタチングルマ、アオノツガザクラが咲き乱れ、いたるところ小池が点在する。幾つか沢や尾根を越え、いい加減にあきあきしてきた頃、白く崩壊した硫黄臭い沢に出る。高天ガ原も近くなったような気がする。その沢を渡り、白い小山を登り、高原のような所に出ると、

こゝには池塘が多く、大きな竜晶池も見られる。

二十分で大東鉱山の事務所に出る。小屋前には湯ノ沢が流れ、温泉小屋には豊富な湯があふれている。更に二〇分が高天ガ原山荘がある。高天ガ原は別名岩苔平ともいい、近くには神秘的な空気がたゞよう水晶池もある。

このコースは新設されたばかりで、まだ敷利りをした程度で、距離も長いから計画は綿密に立てたい。

### 読売新道―赤牛岳―高天ガ原

読売新道は手入れはされているが、長い登りの連続だ。東沢出合から尾根通しを忠実に切り開いた道で、針葉樹がおい茂り、あまり展望はよくないが、夏なら涼しいコースとなる。前コースと同様、幕営の用意が必要である。

尾根に取り付くまでの急坂にちよつと驚くが、尾根に出れば、一カ所鎖がつけられている登りがあるほか、傾斜も比較的ゆるやかである。所要所には「読売新道」の標識もある。二四〇〇米あたりから、灌木林となり、やがてハイマツの稜線に出る。幕営地は森林限界付近がよい。

稜線に出た方が踏み跡は少なくなるが、黒部湖を始め、黒部をとりまく山々の眺望が開けて楽しくなる。

稜線の赤ペンキの印に招かれて、湯の沢の頭(水晶岳の北の肩)にある小さな指導標から、湯ノ沢へと尾根道を下り、硫黄の臭いのする湯ノ沢に出る。昔大銅鉱山が華やかな頃の道に手を入れたもので、まだ一般的なコースとはいえない。二時間ほどで高天ガ原山荘につくだろう。(山博調査員・大町山の会)



高天(たかまき)ガ原 遠方は雲の平

# 裾花(すそばな)源流

## 奇岩と絶壁の裾花峡

長野市から約23軒、私たち裾花源流学術調査の一行は、小雨にけむる鬼無里(きなき)街道をバスにゆられた。

第三紀層の岩盤を深くえぐった谷間を走る道路は、バス一台がやっと通れるだけ。つぎつぎと目の前に現われるカーブを廻り込むたびに溪谷の眺めが変る。時には谷底の流れをはるかに見下す断崖の上で、あるいは溪流に車体を洗われるように低く、その変化はめまぐるしい。

大町附近でたとえるならば、高瀬溪谷を走る道路を骨にして、急行バスが運転される大町―新町間の景色を肉にしたといったら良いだろう。

日本百景のひとつに数えられている裾花峡は、五色滝、不動滝など大小さまざまな滝をかけ、美事な洞窟や奇岩が並ぶ。

「三年たてば水の底だ」、途中からバスに乗込んだ村人の話声が耳についた。溪流に落



## 平林国男

ちた絶壁のたもとに、小さな屋根をさしかけた横穴が散在する。ダム建設のための岩盤調査用とのこと、美しい裾花峡はあと数年で道路もろともダムの底に沈む運命にあることを知った。

### 西京と東京

北北東に流れていた裾花川が、大きく弧を描きながら南東に向を変え。一〇〇〇米以上の山で囲まれた弧の一遇、東から加茂川、西から天押川が合流する小盆地が鬼無里村の中心部である。断崖の谷間、赤土の泥んこ道を走ってきたバスが商店の数軒並んだ舗装道路に入ると終点になる。

「この奥に桜の里があればこそ  
裾花川と人は云うなれ」

この地を訪ねた西行法師の残した歌だといふ。

裾花の流れをばさんで東京(ひがしきょう) 西京(にしきょう)の部落がある。四〇戸前後の戸数をもった部落には、東京に加茂神社、西京に春日神社がある。その昔、北陸路から姫川沿いの千国街道に入り、柳沢峠によって白馬山麓と結ぶ街道のあった頃、京の落人が住みついたといわれる鬼無里村である。

### 奥裾花峡

戸数一三〇〇戸、人口約五〇〇〇人、その九割まで山林原野と農林業に生きる鬼無里村には、立派な製材工場をもつ森林組合がある。裾花源流へ向う私たちの足は、森林組合で所有する三十台近いトラックの一台でまかなわれた。

奥裾花の豊富な森林資源を伐採するためにひらかれた森道は、絶壁の谷間を右に左に廻りながら溪流沿いに進む。

戸隠連山に源流を求めた溪谷は、西側を戸隠の一峯、堂津岳(一九二六米)から派生する奥西山・東山・黒鼻山・八方山・物見山など一五〇〇米以上の山なみで区切られ、北安曇郡小谷村と界を接する。東側は西岳(二〇三五米)から派生する一夜山など一五〇〇米以上の山後が並ぶ。

これら一連の山なみで囲まれ、細長い袋状になった谷間の奥裾花、そこにつけられた林道は、森林伐採の進行にともなって奥地へ奥地へ延びたという。

西京から約一三軒、溪谷が戸隠連山の壁にぶつかって、濁沢と源流部に分かれる合流地点で車を捨てた。終点の西方、東山(一八四九米)の斜面は山頂近くまで伐採が進み、あらわになった山腹一面にカラマツの苗が植林されている。

降りしきる雨の中を三〇米近くある巾の狭い吊橋を渡り、巨岩に渡された八米のハシゴをよじのぼる。岩肌にしがみつきながら一・五軒、調査基地として予定した木曾殿アブキに到着した。

木曾殿アブキという変わった地名のこの場所には、間口四〇米、奥行二〇米、高さ二〇米ほどもある大洞窟がある。せばまった谷間の岩壁が裾花の流れにえぐられ、長い年月をかけてつくった自然の彫刻である。

### 裾花源流の森林とけもの

調査基地に集結を終った調査隊は、直ちに活動を開始した。腰まで流れにかりながら溪流を進行し、あるいは岩の尾根にとりすがり、やぶをこぎながら仕事が進められる。

溪流の影響を強く受ける谷あいには、サワグルミ、トチ、など沢筋に発達する森林が散在し、土壌の浅い岩の尾根には、ヒメコマツコメツガなどの針葉樹が見られる。谷間から離れ土壌の安定した尾根には見事なブナ林が大規模にひろがる。胸高直経五〇種、樹高三〇米前後の大木で構成されるブナの下には、ハウチワカエデ、オガラバナ、オオカメノキチシマザサなどの灌木が見られる。構成種の内容は大町周辺のブナ林と変らない。しかし冬季の積雪量が極端に多いこの地方は、大町以北のブナ林と類似度が高く、大町附近では見られないチヤボガヤ・エゾユズリハなど日本海地域に限られる種類が混入する。

クマ・サル・キツネ・アナグマ・タヌキ・テン・イタチなど北アに見られるものの仲間は大部分の種類が棲んでいる。

「ひい爺さんの昔、この谷で十頭ほど獲った話を聞いているがね……」林道工事をしてきた地元の人が話してくれた。たしかにカモシカの棲みそうな山容である。しかし獲ったという確かな話には出くわさなかった。最近源流近くまで足を踏み入れる登山者が増えているが、カモシカを見たという話は全く聞かない。勿論私たちはカモシカが棲むという証処は何ひとつ握むことができなかった。

取り残された秘境といわれる裾花源流は北アルプスと深い関係をもつ、動植物の面からもこのことはうかがえるが、まだまだ未知の問題が山積し、学問的興味の高い地域である。森林開発にともなっていないよよ奥深くまで林道が延びつつあるが、自然保護との関連のもとにあくまで自然との調和のとれた開発を進めて頂きたいものである。



「斗代」とはその田畑における収穫量を示しているもので(前号における「課税率すなわち斗代」を「収穫率」と訂正)この斗代は検地後の課税に重大な意義をもっている。前号の上一本木村検地帳についてみると、上一本木村における上田の面積は三町五反六歩でそれはいずれも一反歩につき一石五斗の斗代で計算されていて、上田からは五十二石余の収穫があったことが判る。また上田から中田の間の斗代には、一反歩につき二斗の差、以下同様にして二斗の差で下つていく、すなわち「二斗下り」となっている。これは、この斗代についても同様で、収穫を米に換算して二斗下りとなっているが、ただ下畑から下々畑の間は四斗下りの斗代となつている。これは、下々畑ともなれば課税対象にならないほどの地味の低さを物語るものでもあつたが、そのほかの理由として、原野を切り開いて新たに畑をつくつた場合は、開墾奨励の意味から検地帳登録の段階には下々畑として登録したことによるとされている。右に見てきた斗代は上一本木村の場合であるが、ほかの村では同じ上田といつてもそれぞれ斗代が異なり、松本市山辺付近のように二石三斗代とはなはだ高率の上田もあれば、北安白馬村深空近辺の五斗五升代と極めて低率の上田もあつて、松本領内一様ではない。よく田の地味を「あそここの田は上田」などというが、他の村の上田とは比較対象することはできない言葉である。すなわち「斗代」はその村限りにおいて等級づけられるものなのである。一般に大町以北は寒冷多雪や地味の低いことから斗代も低く、漸次南へ行くにつれて斗代が高くなつていく。一説には、斗代

慶安の竿請 (三) 巾 具 義

の決定にあたっては、藩(松本城下)へ年貢米を輸送するときの不便をすずに考慮しているものであるから、遠隔の北安曇北郡は低率であるともいわれているが、その辺は如何なものであろう。以上は田や普通畑(桑畑も含む)の斗代についてみてきたのであるが、このほかに麻畑は地目を別にして登録されている。北安曇では山村部に麻の栽培がさかんであつた。一般に麻は地味の高い畑に栽培されていたようだが、麻畑にはその村における上畑より一斗から三斗ほど高い斗代が決定されていた。また百姓の住んでいる屋敷地も検地を請け、これにもその村の上畑なみの斗代が課せられている。かくのごとく、検地はその村の地味以後の貢租額を決定し、百姓の生活に大きくひびくものであつたので、大きな関心事とされてきた。すなわち百姓は出さざる限り寛大な検地をねがうのあまり、出向いてくる検地役人の御機嫌とりに意を払い、役人の食事をとびきり上等にしたり、宿舎となる村役人の住宅を新築したり、はては贈賄までしているような例もあつたようである。そこで領主は、このようなことをおさえるために、検地役人が村へ出向く前に、これから行われる検地において一切不平不正なことを致さない旨の誓紙を検地役人に提出させ、また村に対しては飲酒食事の饗応基準を示したり、宿泊所の整備を依頼するように触れ書きを出したりしている。甚しい例は、村内に役人が宿泊すると百姓と馴れ合いになると、民家から離れた野原や川原に宿舎を建て泊らせ不正事を防止した例もある。とにかく検地の重大さがうかがえる話である。

(松川小学校教諭)

カシラダカ

長沢修介

山々が黄はみ始め、そしてその黄が次第に下つて、やがて里も紅葉一色になる頃は峯々に何度も雪が降り、林の中を歩いてみてもすっかり淋しく夏の花やかさを思い返す術もない。そんな林の中で紅葉の美しさに見とれ、澄み切った空の青さにその深さを感じていると一群のヒヨドリが通る。20羽、30羽と大群でヒヨ、ヒヨとお互に鳴きながら峯から峯へと渡って行く。このヒヨドリの群が毎日上空を通過するようになるとやがて冬鳥の一群がやって来る。始はそれと知れずやがて里の雑木林などに散ってひっそりと一冬を越す。そんな仲間でもこのカシラダカは代表的なもので大群で渡って来ても越冬地では少群に散って雑木林や田圃でひっそりと一冬を過すのである。



博物館ニュース

ギヤチンカン遠征報告会開く

長野県岳連のヒマラヤ遠征隊には郷土出身の古原隊長、武田隊長も参加、本年四月見事ギヤチン・カン初登頂に成功したところであるが、こんど文化祭の記念行事として十一月六日、七日、大町市民会館で報告会を開くことにした。両氏の挨拶のほかに映画ギヤチン・カンなども上映される。

一方山岳博物館でギヤチン・カン登頂に使った装備一式や記録写真などによるギヤチン・カン展を開催するなど、大町市はこのところちよつとしたギヤチン・カンブームとなっている。

入館料改定

本館の入館料は昭和26年以來のものであつたが11月1日より次の様に改められた。  
大人 30円 小人 20円  
団体20円 団体10円  
(団体は30名以上)

表紙説明

黒部ダム 遠方は赤牛岳  
撮影 高橋秀男

山と博物館 第九巻 第十号  
一九六四年十月二十五日発行  
発行所 長野県大町市TEL(大町)二二一  
大町山岳博物館  
印刷所 大町市上仲町  
信州印刷大町工場